

# 伊賀上野「刈草ロール」無料配布のとりくみ ～人が、資源が、つながるしくみづくり～

堀 吉之<sup>1</sup>・中川 健二<sup>2</sup>

<sup>1</sup>近畿地方整備局 木津川上流河川事務所 伊賀上野出張所（〒518-0825 三重県伊賀市小田町242）

<sup>2</sup>近畿地方整備局 木津川上流河川事務所 管理課（〒518-0723 三重県名張市木屋町812-1）。

従来有料処分していた堤防の刈草を「刈草ロール」として公募により無料で配布するとりくみを開始した。配布先の確保にあたっては、地域イベントへの出展、道の駅サンプル展示、利用者フォロー、積込みサポート等のコミュニケーションを重視したとりくみを行ってきた。その結果、急速に拡大し、2年間で延べ「約360組」「約11700個」の配布を行うことができた。このとりくみは、コスト縮減や資源循環の確立だけでなく、地域との協力関係を構築する公報としての一面もあったと考えている。本論では、とりくみの概要や実践的に取り組んだ内容を中心に紹介するとともに、成果や課題について概説する。

キーワード コスト縮減、資源循環、広報、コミュニケーション、刈草ロール、地域との協働

## 1. はじめに

維持管理分野においては、単なる頻度や量の削減によらず、創意工夫により管理水準を維持しながら、コスト縮減を図っていくことが求められている。こうした潮流の中、堤防除草で発生する「刈草の配布」によるコスト縮減が全国的に実施され、一定の成果を挙げてきている。そこで当事務所においても、とりくみを平成22年度から試行開始した。しかし、当地域においては畜産業が活発でない等、先行事例とは異なる面も多々あり、半信半疑の中での開始であった。当初はほとんど反響がなかったものの、配布や宣伝方法を職員自らの手作りで試行錯誤しながら取り組んだ結果、2年間で地域の方を中心に延べ「約360組」「約11700個」を配布し、予想を超えて様々な分野に拡大して多くの方に利用して頂けるまでになった。

本論では、とりくみにあたって実践した内容を紹介するとともに、その成果や課題について整理し、今後の展望を述べる。

## 2. 堤防除草の概要

### (1) 出張所 管内の除草状況

堤防の機能を維持するとともに、亀裂、法崩れなどの異常を早期に発見するため、年間2回で約120万㎡の堤防除草を行っている。発生した刈草は、安価な「現地焼却」を基本としつつも、コストは高いが人家付近等は「一般廃棄物として民間処分場で有料処分」としていた。後者は、堤防除草コスト全体の「約3割」を占めており、コスト縮減が急務であった。

### (2) 刈草ロールについて

#### a)概要

ロールは、直径50cm、高さ70cmの円柱形で、重さは20～30kgとなる。ラッピング（調製）の「あり」と「なし」の2種類を提供している。主な用途は、農業用マルチ材、堆肥材料、家畜飼料・敷料等である。



写真-1 (左) ラップ「あり」と「なし」、(右) 利用状況

#### b)製造手順

①塵芥処理→②除草→③集草→【④乾燥】→【⑤梱包】→【⑥運搬】→【⑦調製】→【⑧配布】

※【 】はロールのみに生じる工程



写真-2 (左) ⑤梱包作業、(右) ⑦調製(ラップ)作業

(3) 除草形態別コスト比

従来方法とロール化した場合のコスト比を示す。



図-1 除草形態別コスト比

→民間処分場を100とした場合、ロール化では“3～4割”作業単価の縮減が見込める。

(4) 留意事項

刈草は、廃掃法で「一般廃棄物」として扱われる。管轄する市と協議を重ね、利用者に積込・運搬を担わせることを条件に「有価物」として扱うことを確認し、配布が可能となっている。

3. 無料配布のとりくみ

(1) 公募概要

配布は、除草時期に合わせて年2回の公募制とし、幅広く利用者を募った。維持作業で製造したロールを指定場所まで運搬し、利用者には積込み・運搬を行って頂いた。製造を除き、企画～宣伝～立会・配布までを全て職員自ら行っている。

(2) とりくみにあたっての方針

a) 継続可能なしくみづくり

処分コストは縮減したものの、とりくみ自体の運営コストが増大する等、本末転倒な結果にもなりかねない。そのため、運営は職員自らが通常業務の中で行える範囲かつ、低コストなものを心がけた。また、一過性で終わっては、行政の信頼を損ねる事態にもなりかねない。このような点に配慮し、「継続可能なしくみをつくる」ことに注力した。

b) 行政と住民の協力関係を育む距離感

利用者側にも、とりくみに参加することで環境問題やコストの縮減に貢献できるとの想いが少なからずあると推測される。こういった面を啓発するとともに、過度な行政側からの押しつけではなく、相互の協力関係を最大限に引き出せる距離感を保つことを心がけた。

c) 「刈草ロール」のファンをつくる

戦略的なイメージ構築が重要と考え、愛着の持てる印象的な外見や、とりくみ自体が持つ本来の良さを前面に出してアピールし、利用者や関係者に「ファンをつくる」という意識で臨んだ。

d) コミュニケーションの重視

開始当初から手探りな部分も多々あり、拡大にあつ

ては、関係者や利用者と共にコミュニケーションをとりながら、柔軟かつきめ細やかな対応を行う必要があった。

(3) とりくみの具体内容

とりくみにあたり実施した宣伝や広報活動の具体的な内容について以下に述べる。

a) 地域イベントへの出展

茶業が盛んな京都府南部地域(和束町・南山城村)での産業祭へのブース出展を行った。分析やヒアリングの結果から有望な需要先であったためである。ここでは、単なる宣伝や配布だけではなく、「刈草ロール製造実演」や刈草ロールをキャラクターにした「撮影スポット」を設け、親しみのあるブースづくりを心がけた。2回の出展で60組以上の方が来訪、約600個を配布することができた。ロールに興味のある方に加え、子連れの親子等も多数来訪頂き、皆様から概ね好意的な感想を頂戴した。



写真-3 和束町「茶源郷まつり」にて

b) 道の駅等への展示

道の駅、関係市町村、関係機関、JA、野菜直売所、現地にサンプル・のぼり・広告物の展示を行った。サンプル展示は非常にインパクトがあり多くの方の目を引いた。また、道の駅への展示が記者の目に止まり新聞掲載につながったことも大きな成果である。



写真4 (左) 道の駅針T.R.S、(右) 出張所前

c) メディアの活用

全国紙や営農者向け新聞の4紙に計7回の記事を掲載頂いた。資料配付自体に反応が無かったが、利用者との交流や道の駅の展示をきっかけに掲載が実現した。

地元ケーブルテレビでもニュース番組で2回にわたりとりくみを紹介頂いた。一度放映頂くと、継続的なソースとなるため、現在も良好な関係が続いている。

その他、広報費を支弁して地域情報紙へのチラシ折り

込み54000部を行うなど、地域に密着した宣伝を行った。



写真5 テレビ放映(左)、チラシ(右)

d)関係機関や団体への働きかけ

市や県の農業関係部局の意見交換では、協力や助言を頂いた。また、営農者向けの講習会があれば、時間を頂いてとりくみのPRを行った。さらに、当事務所で主催する対外的な出前講座・講習会等でも機会あるごとにPRを行った。

e)職員による積み込みサポート

休日及び平日に集中的に配布する日を設けて、数名の職員を配置して積み込みのサポートを6回にわたり行った。あわせて利用者に率直な意見を聞くためにヒアリングを行い、継続利用や新たな需要発掘につなげた。



写真6 (左) サポート状況、(右) 積み込みサポート隊

f)利用者へのフォロー

利用者を対象に、アンケートや電話ヒアリングを行い、利用状況について調査するとともに、継続利用の意思があれば直接申込書を送付するフォロー活動を行った。また、大口利用者や積極的に利用する方を中心に取材活動を行い、事務所特設ホームページで利用方法を公開している。利用者の方に、ブログに掲載いただくなど、うれしい反響も多数あった。



写真7 (左) 利用者取材状況、(右) 特設HP利用者紹介

g)ファンをつくるイメージ戦略

関係者のとりくみへの機運を高めるために、統一的使用するロゴやキャラクターを作成した。また、「刈草ロール」の愛称を統一使用した。さらに、事務所特設ホームページを開設し、刈草ロールの魅力やとりくみの経過をまとめるとともに、熱心な利用者を紹介する試みを行った。

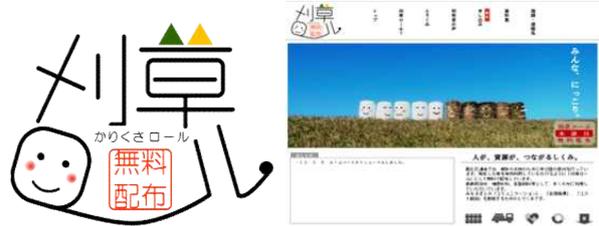


写真8 (左) 活動ロゴ、(右) 特設ホームページ

5. 成果とその分析

(1) 配布について

a)配布数の推移

とりくみを行った2年間での配布数と申込者の推移について下記に示す。

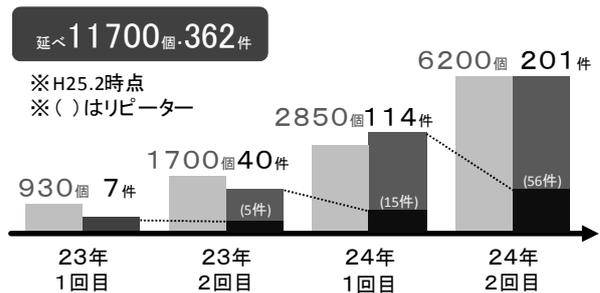


図2 配布数の推移

→配布数は急速に拡大し、最終的にはロール化可能なもの全てを「刈草ロール」として配布することができた。また、一定数のリピーターを確保できた。平成24年2回目の配布にあたっては、前回利用者の“約50%”が継続的に申し込んでいる。

b) 配布先の分布

配布先の件数別の地域分布を下記に示す。



図4 配布先の分布

→市内や隣接市町村を中心とした申し込みがあった。メディアの効果もあり、遠方からの申し込みもあった。

c) 利用形態

利用用途別の割合（左）、大口・小口と個人・産業利用の別についての割合（右）について以下に示す。なお、後者は利用個数に応じて便宜的に分けたものである。

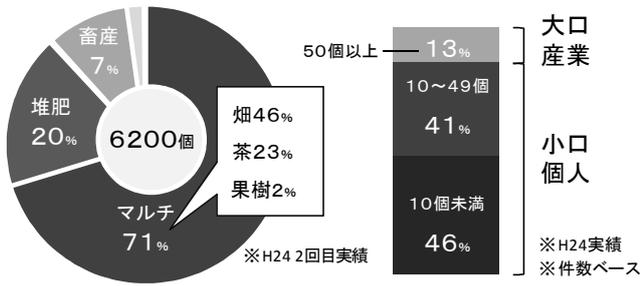


図-3 利用形態

→当初予想していた畜産での利用は伸びず、マルチ材（畑や茶）が大きな割合を占めた。また、小口の個人利用が大きな割合となった。

d) ヒアリング結果

利用者フォロー時や積み込みサポート時に、200件程度のヒアリングを行った。代表的な意見を下記に示す。

- ◆ 筍の敷藁に使用しているが、従来のわらと比べても遜色ない。とりくみには共感できるので、広まることを期待したい。（筍農家・男性）
- ◆ 農地の敷草として、雑草の抑制及び微生物の成育に役立っている。（大規模農園・男性）
- ◆ 畑に敷くワラが入手困難であり、代替品としては十分である。（家庭菜園・男性）
- ◆ 野菜用のマルチとして利用。紐を切ってコロコロと転がすだけで、女性の私でも畑へ簡単に引くことが出来た。（家庭菜園・女性）
- ◆ 茶畑の幼木の育成、畝間の土砂流失防止に利用している。（茶農家・男性）
- ◆ 牛の飼料として与えた。場合にもよるが、雑草でも食べる。（畜産関係者・男性）
- ◆ ラップ、ナイロン紐の処分が困難。（農園・男性）

→詳細な利用形態や問題点が明らかになった。問題点については、継続的に改善を行っていく予定である。

(2) コスト縮減

4年間での除草費用の推移を下記に示す。

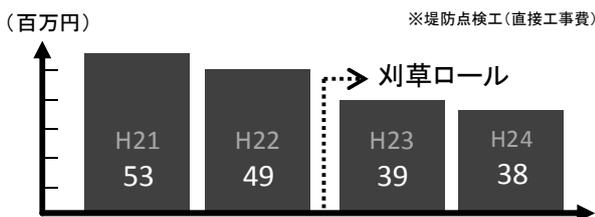


図-5 除草費用の推移

→とりくみ開始前の平成22年度を基準とすると、平成24年度においては、除草費用全体で“約1100万円（約2割）”を削減した。ただし、除草面積の経年変化は考慮していない。

(3) 広報としての一面

国土交通省の存在は知っているものの、地域に具体的にどのような役割を果たしているのかわからない方も多し。とりくみを通じて、その存在を認知していただくきっかけになったと考えている。また、利用者との密なコミュニケーションが、信頼関係構築につながると考えている。

(4) 他にとりくみへの波及効果

台風17号で堆積した流木、河川敷より伐採した竹についても無料配布を行った。公募ノウハウの蓄積やロールによる認知度の高まりもあり、対象数量全てを配布することができた。ここでも好循環が生まれている。

6. 考察

(1) 成果への考察

先行事例と比較しても十分にとりくみは成果を挙げたと考えている。特に利用者の拡大は、他の事例と比較しても特筆すべきものである。これらは、マスメディアの取材等の偶然が重なった部分も大きいと考えるが、戦略的にとりくんできたことも多々ある。以下にその要因と考えられるものを述べる。

- ◆ とりくみが持つ本来的な良さに共感して下さる関係者や利用者の方が多く、とりくみへの機運が高まり、有形無形の協力が得られた。
- ◆ 機会あるごとにPRしたことが、TV取材や新聞掲載、口コミでの拡大につながった。
- ◆ 職員自らが、多くの方と密にコミュニケーションを図り、情報収集分析を行い、新たな需要発掘に取り組んだ。

7. 今後の課題

(1) 課題

a) さらなるコスト縮減

当事務所独自のとりくみとして、ラップ（調製）を施した状態での提供も行っている。保管や運搬の容易さから人気もあるが、相当の経費がかかるため、代替方法や配布数の縮減が必要である。

b) 事務の省力化

配布数の増大に伴い、事務処理量の増加が懸念される。処理には、立会も含めて1件あたり1時間程度を要するため、事務処理の簡素化が課題である。

c) 作業用機械の標準化

使用した梱包・調製用の機械については、農業用機械であり、市場にリース品がなく流通も少ない。とりくみ

の先行きが見えないなかで、受注者で購入し、初めて作業が可能となっている。また、梱包の歩掛りが実態と合わないとの指摘もあり、適正な費用計上が求められる。とりくみにあたっては、受発注者の信頼関係が不可欠である。

## 8. さいごに

事務所一丸となったとりくみは、コスト縮減や資源循環の確立、広報という面でも一定の成果を挙げることができた。また、継続的に実施可能な“しくみ”を構築できたことも成果であると考えている。一方、急速な拡大を図ったことからその反動も懸念されるところである。今後も安定的な配布を続けていくためには予断を許さず、さらなる一手が必要である。一過性のものではなく、持

続的なとりくみこそがさらなる信頼関係の構築には重要である。

最後に、ここまでとりくみが成長したのは、共感して下さった利用者や関係者のご厚意により支えられたところが大きかったのではないかと思う。タイトル「人が、資源が、つながるしくみ」には、そういった方々への感謝の意を込めた。本とりくみが、官民協働に向けた信頼関係構築のための実践的な事例となれば幸いである。

**謝辞：**とりくみに関心を持ち従来の範囲を超えてご協力下さった利用者の方、関係市町村や団体の方、とりくみを支えて頂いた整備局関係者の皆様にこの場をお借りして謝辞の意を表します。